

吉岡まさみ

高松港からフェリーに 20 分乗ると女木島に到着する。瀬戸内海の小さな島で、めぎじまと読む。2015 年の 10 月にわたしは倉重光則の新作を見るために女木島に降り立った。

栈橋から歩いてすぐのところ、女木ハウスがある。女木ハウスというのは、愛知県立芸術大学が運営する施設で、年間を通して、コンサートや美術展などのイベントが学生を巻き込んで大学が企画をしているものである。古民家を改装した建物があり、屋外にはステージが設えてある。板敷きの観客席は 100 人以上の収容能力がありそうである。

倉重の作品は、その板敷きの観客席の一角に設置されていた。

鉄板で作られた塔が建っている。塔といっても中は空洞である。高さは 6.7m、底辺は 65×65cm の正方形である。天井は開いているので、ちょっとした煙突ということができる。痩せたサンタクロースならプレゼントを持って通り抜けられそうである。サンタクロースが降りてきたところに出口があるわけだが、これは 40cm 四方程度の大きさなので、通り抜けるのに難渋しそうではある。出口は対面に 2 箇所ある。観客はこの穴に頭を突っ込み、横たわりながら煙突の四角い穴から空を眺めるといふ仕掛けである。

実際に板敷きのステージに寝転んで頭を「出口」に入れて上を見上げると、まぶしい青空が正方形に切り取られ、雲が流れていく様は映像を見ているようだ。倉重は

「夜はもっといいよ」

という。何も見えないんじゃないの？とわたしが訊くと

「真っ暗闇が見えるんだよ。それがすごくいい」

と答えるのだった。

さて、作品はこの「塔」だけなのかというと、実はもうひとつ「付属品」がついている。

それは人体を模した彫刻作品である。倉重はこの人型を「人形」と呼んでいるが、人体をリアルに作りこみ、型取りをし、プラスチックを流し込んで作ったこの作品はどう見ても彫刻なのである。この人体彫刻は、横たえられて、二つある出口のひとつにその頭を差し込まれている。真っ白な人体は、男でも女でもない。見ようによっては死体である。

倉重がこの「人形」を設置したのは、当初、こういうふうに入れたらいいかと空を見てくださると、鑑賞の仕方を示すために作ろうとしたらしい。この人形と同じ姿勢になってくださいという、いわば「取扱説明書の挿絵」の役割をこの人形に任せようとしていたらしいのだ。

しかし、実際に作って、会場に置いてみると、その「人形」は思いのほか存在感があり、「付属品」には思えなくなった、というのが本当のところではないかとわたしは考えている。その存在感はあまりにも異様で強烈なので、誰もこれを見て、ああ、こういうふうに見るんですね、と了解する人はいないだろう。「人形」は「取扱説明書の挿絵」の働きをしていないのだ。それどころか、本来の作品である「塔」の存在が霞んでしまいそうなほどにその形は異彩を放っている。夜になると、この「人形」はさらにその異様さを増幅させる。この人形の中にはネオンが仕込んである。夜になり、電源を入れるとネオンの青い光が人形の内部から放たれる。女木島の夜は街灯もほとんどないので、本当に真っ暗である。その闇の中に「人形」が光をまもって浮かび上がる。これも予想外だったと思われるのだが、ネオンの光は人形の形を消失させてしまうほど強烈で、思わず「眩しい！」と叫んでしまうほどなのである。

さて、この作品をどういうふうに見ればいいのかという問題にとりかからなければならない。わたしはここで作品の内容について事細かに解説をしようとは思っていない。作品そのものよりも、それを作った倉重光則の思考法、あるいは起こり来る事態に対する対処法を見ていくことで、つまり、倉重という人物に焦点を合わせることで、作品を外側から検分していこうと考えているのだ。

そもそも、正方形という形にこだわり、光という「素材」を生かしながら、幾何学的な世界を通してその世界観を表現してきた倉重が、いとも簡単に、人体の形をした彫刻を作り始めたというその柔軟性とイメージの跳躍力に驚かされる。なぜ彫刻を作ったのか。その理由はここでは考えないでおこう。幾何学的な抽象から具象的な立体への移行が、いとも簡単に実行されたという事実のほうが今は重要である。倉重はこういうことを平気でやるのだ。不良である。富岡多恵子の言葉を借りれば「踏み外した」のである。不良だからこそ彫刻へ飛び跳ねることができたのである。真面目な「良い子」にはその跳躍力は期待できない。

倉重は今回の個展（2016 年 1 月 12 日（火）-23 日（土） Steps Gallery）で、この「人形」に EBE と命名した。これは、extraterrestrial biological entity の略で、地球外生命体という意味だそう。イーバと読む。宇宙人のことである。倉重の作品 EBE は予定外のところから突然に現れたという点で宇宙人と同じである。

当初、この宇宙人は、倉重の「塔」の作品の付属物であり「取扱説明書の挿絵」であるとわたしは書いた。しかし、この宇宙人は付属物を通り越して、メインの作品になるような迫力を身につけてしまった。これは倉重にとって予定外のことだろうと想像できる。真面目な作家から見たら、予定外＝失敗である。ある意味で、この宇宙人は倉重の「塔」の作品を壊しかねない存在になってしまったということができる。おそらくこの真面目な作家は、失敗を看過することができずに、作品に変更を加えるか、始めから作り直すに違いないのだが、倉重はここでも驚くべき跳躍をするのである。すなわち、失敗は失敗のままに放置する。そして、作品に手を加えるのではなくて、考え方を方向転換させていくのだ。すなわち、この EBE は付属品ではなく、メインの作品である、と認め直すのである。そこから新しい展開が始まるのだ、ということに不良ならではの嗅覚で感知するのだ。これは考え方の柔軟性というのとは違う。柔軟性というよりは、無鉄砲、あるいは思い切りの良さなのである。踏み外しである。

倉重は人生そのものを賭けてしまっているのだから、いざというときにはこういう「賭け」に出るのである。

女木島では横になっていた EBE は、Steps Gallery では立ち上がり、壁に掛けられる。「塔」の天井に見えていた正方形の青空と夜の暗闇は、ギャラリーの壁にドロイングとして表現されることになる。女木島での作品の主客はここで完全に逆転することになる。この逆転こそが倉重の跳躍であり賭けの様態である。

「われわれの悪をわれわれの善と言い換える」と言ったニーチェの言葉が脳裏をよぎる。

われわれは倉重の賭けをどう見るのだろうか。それは、大袈裟に言えば、われわれの考え方と生き方を見直す契機となるだろう。EBE はどこから来たのだろうか。